

作品集

さくひんしゅう

うみ

かんせいかん

いらい

すいどう

しゅごしん

海の管制官く伊良湖水道の守護神く

かいすい

ちから

しょくぶつ

海水の力植物のふしぎ

もくじ 目次

しょうがくせいぶ
〈小学生の部〉

さいゆうしょうしょう
最優秀賞

うみ
海

かんせい
管制官

いづこ
伊良湖水道

しゅごしん
守護神

とよはしりつふくおかしょうがっこう
豊橋市立福岡小学校 五年

ごねん しが ゆうた
志賀 優龍

かいすい
海水

ちからしよくぶつ
植物のふしぎ

「海水の力植物のふしぎ」

おおさかしりつはんなんしょうがっこう
大阪市立阪南小学校 二年 立山 怜佳

24 8

ゆうしょうしょう
優秀賞

うみ
海

「おくいぞめのたい」

ちばしりつおぐらしょうがっこう
千葉市立小倉小学校 一年 松隈 唯

「おさかなつりたい」

えひめだいがくきょういぐがくぶぞくしょうがっこう
愛媛大学教育学部附属小学校 一年 若狭 早

35 32

にゅうしょう
入賞

あした
明日

「明日の能登」

みましろつえはらみなみしょうがっこう
美馬市立江原南小学校 六年 坂本 孝仁

うみ
海

あかしりつあかししょうがっこう
明石市立明石小学校 二年 梅崎 みなと

うみ
海

あかしりつえいがししょうがっこう
明石市立江井島小学校 五年 松下 泰知

「オーベイとたたかった海」

ふなばしりつたきのいしょうがっこう
船橋市立田喜野井小学校 四年 田中 佑築

51 46 43 40

「仙人との出会い」 おおさかしりつながよししょうがっこう ごねん いまむら した
 大阪市立長吉小学校 五年 今村 琉汰
 「友達と釣り」 あかしりつたいかんしょうがっこう ごねん つだ あきら
 明石市立大観小学校 五年 津田 旭
 「ぼくの大好きな明石ノリ」 あかし だいす
 明石市内小学校 五年 義経
 「令和のイカナゴは高級品」 れいわ
 伊丹市立狹野小学校 五年 木元 孝亮

〈中学生の部〉

入賞 にゅうしょう

「離島の海をいつも心に」 りとう うみ はる

〈選考委員講評〉

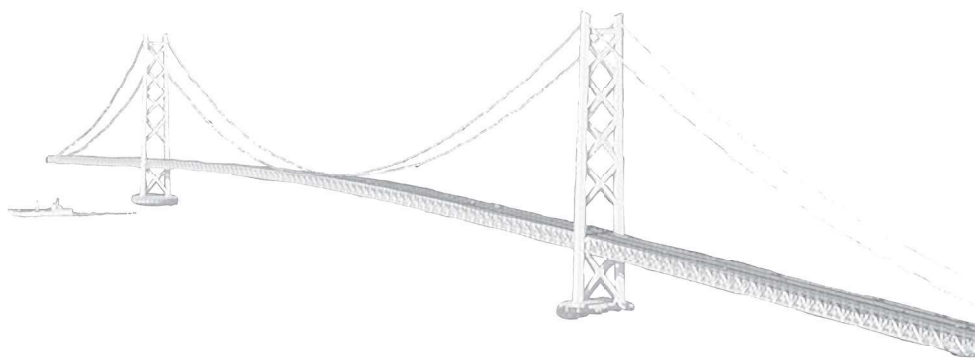
さいしょう はづき
 最相 葉月
 たなかしん

〈あとがき〉

あかし
 明石おさかな普及協議会会長 川崎 喜昭

※作品名の五十音順

94 91 88 80 73 70 67 59



〈しょうがくせい小学生の部ぶ〉



海の管制官く伊良湖水道の守護神く

志賀優龍

とよはしりつふくおかしょうがっこう
豊橋市立福岡小学校 五年

ぼくは、二〇二四年十月十三日、新聞の朝刊を読んで、愛知県田原市にある伊良湖岬の先端の高台に建つ伊勢湾海上交通センターがバックヤードを初公開するプレミアムツアーの参加者を募集していることを知った。ぼくは、お母さんにお願

いして、早速電話をもらい、応募した。

後日、ぼくはたくさんのお母さんの中から幸運にも抽選で選ばれ、十一月の海と灯台ウィークに開催される伊勢湾海上交通センターのバックヤードツアーに参加す

ることができ、という連絡が届いた。ぼくは飛び上がって喜んだ。

バックヤードツアーは、普段入ることのできない渥美半島の先端にある伊良湖岬の高台にそびえる伊勢湾海上交通センターの管制塔の施設見学だけではなくて、今回初公開となる管制塔の屋上までの一〇八段の階段を上って太平洋と三河湾を一望に眺めるといふ、プレミアムな内容だった。

渥美半島にある伊良湖岬は、恋人の聖地といわれる「恋路が浜」が太平洋に広がる。ぼくは、渥美半島の海と空が大好きだ。ぼくは、恋路が浜の長く続く白い砂浜に打ち寄せる波と追いかけてっこをしながら、はだしで青い風を切って走ることが好きだ。恋路が浜には、日出や夕日がきれいに見られる「日出の石門（太平洋の波で真ん中が侵食されて大きな穴が開いている石門）」がある。石門の穴から太平洋を見ると、打ち寄せる太平洋の波がしぶきをあげて穴の中に流れ込んできて、自然のすごさを実感できる。

また、恋路が浜は、島崎藤村が作詞した「椰子の実」誕生の地で、歌碑がある。「椰子の実」の歌は、民俗学者の柳田國男が明治三十一年の夏に伊良湖岬に滞在していたとき、海に椰子の実が流れ着いたことがあり、そのときの話を島崎藤村に話したことから、「名も知らぬ遠き島より流れよる椰子の実ひとつ」の歌が生まれたと言われているのは、とても有名な話だ。

恋路が浜から神島の見える伊良湖岬の先端へ歩くと、夕日が沈むところに絶景といわれる白亜の灯台が建っている。

伊良湖岬のある渥美半島では、毎年二月初ころから菜の花が畑一面に咲いて、黄色のじゅうたんがあちこちにできる常春の地でもある。

このように、伊良湖岬は、国内外からたくさんの観光客が絶えず訪れるところだ。そのため、たくさんの方が、恋路が浜から伊良湖岬の先端にある白亜の灯台へ続く遊歩道を散策したり、サイクリングをしている。

伊勢湾海上交通センターの管制塔へ続く道は、伊良湖岬の恋路が浜から続くサイクリングロードや散歩道の途中から曲がって行くのだが、スタート地点の恋路が浜からはほぼ坂道が続き、途中から「傾斜十二度」と書かれた標識のある坂道をさらに上へ歩くと、約十五分のちよつとした登山道だった。

見学当日は、前日まで天気予報で雨が曇りだと言われていたが、青空がどこまでも続き、風もほとんどなく、絶好の天気になった。

最初に、ぼくは、伊勢湾海上交通センターの管制官から、大きな画面に映し出されたスライドを見ながら、昭和の時代に大きな船の海上事故が絶えなかったこと、海上での大きな船の事故を減らすための法がつけられたこと、船の通行の安全を守るために海上交通センターが作られて管制官が配置されたこと、管制官は船が安全

通行つうこうできるように情報じょうほうを提供ていきょうするために船ふねの船長せんちょうと通信つうしんでやりとりする仕事しごとをしていること等の説明せつめいを聞いた。

伊良湖岬いらみさきに海上交通センターができたきっかけは、伊良湖岬いらみさきの沖合おきあいで二つの事故じこが立て続けたつづつに起きたことだった。二つの事故じこが起きた当時は、まだ管制官かんせい官がいなく、海上交通安全かいじょうこうあんの法ほうもなかった。

一つ目の大きな事故じこは、昭和四十七年七月しやうわ よんじゅうななねんしちがつ、神島北かみしまきたの伊勢湾内いせわん ないでリベリアの貨物船かもつせん「グランド・フェア号」とオランダのタンカー「コラティア号」が衝突しょうつし、燃料油等ねんりようあぶらなどが流出しゅつしゅつしたことがあった。

二つ目の大きな事故じこは、昭和四十八年五月三日しやうわ よんじゅうはちねんごがつ みつか、伊良湖水道いらづ さいどうの北口きたぐちで、西ドイツの貨物船かもつせん「メリアン号」がタンカー「日聖丸」に追突ついとつし、日聖丸にっせいまるから長期間ちやうきかんにわたって大量の油たいりよう あぶらが広く海うみに流れ出たことだった。伊勢湾南部いせわん なんぶ、三河湾西部みかわん せいぶ、志摩半島沖しまはんしう おき、熊野灘等くまの なだなどに流れ出た大量の油たいりよう あぶらが、これらの沿岸えんがんを汚染おせんした。流れ出た油なが で あぶらを防除ぼうじょする作業さぎようは、当時行われていたような地域的な協力体制ちいきてき きやうりよくたいせいのみでは、とても対処たいしよできなかった。そこで、関係かんけいする多くの機関きかんが力を合わせて大量の油たいりよう あぶらによる汚染おせん問題を解決かいけつした。

これを教訓きょうくんとして、新しい体制たいせいが必要だ、ということから、昭和四十八年十一月しやうわ よんじゅうはちねんじゅうい月、伊勢湾流出油対策協議会いせわん りゅうしゅつめたいさくぎぎかいが発足はつそくし、管内全域かんないぜんいきの交通安全こうつうあんぜんを守るための制度せいど

ができた。

また、昭和四十八年七月には、次のようなルールができた。

「海上交通安全法」が施行され、伊勢湾の一部を除いて、この法が適用されることになった。

伊良湖水道と呼ばれる伊勢湾口の伊良湖岬と神島との間にあって、太平洋から伊勢湾や三河湾に入る水道には、「伊良湖水道航路」が定められ、航路を往来するとき、法で定められた一定の大きさのある船は、特別な航法を守らなければならないことになった。

航路の安全を確保するため、管制官が配置されることになった。

伊良湖水道の航路の近くにいる大小の船の動きを常に把握するため、昭和四十九年三月、伊良湖水道航路管制信号所が完成した。このとき、大きな船を管制し、周辺の船に大きな船の航行を知らせる信号表示等の業務が開始した。

このように、海上での大きな船の事故を二度と起こさないよう、海上での交通ルールの法ができ、管制官が配置され、管制塔が作られ、管制官が海の交通安全を休みなく守り続けてくれていることを、ぼくは、管制官の説明を聞くまで知らなかった。

海上交通センターは、全国に七か所ある。伊勢湾のほか、名古屋港、東京湾、大阪湾、関門海峡、瀬戸内海にある来島海峡と備讃瀬戸だ。どこも大きな船が通る

ときに事故の起きやすい複雑な地形と水路のところだ。

空港で飛行機の誘導などをする管制官がいるように、海で船を安全に通行できるように誘導するのが、海上交通センターの管制官だ。

ぼくが行った伊勢湾海上交通センターの管制塔は、海上保安庁の第四管区内であり、太平洋、三河湾、伊勢湾の海上交通の安全を守ってくれている。

伊良湖岬に管制塔がつくられたのは、伊良湖岬沖合で長さが五十メートル以上の大きな船が通行できる水深の深い場所の区域がとても狭く、座礁等の船の事故が起きやすいので、それを防ぐためだった。

伊良湖水道は、横幅が一・二キロメートルくらいで距離の長さが三・九キロメートルくらい細長い長方形の形をしている。この大きさは、車の運転に例えると、中央分離帯のない片側一車線の道路の幅くらいしかない。つまり、大きな船が伊良湖水道を通行するというのは、タンクローリー等の大きな車が中央分離帯のない片側一車線しかない道路を走るとようなものだ。

大きな船が伊良湖水道を通行するときは、必ず右にしつかり寄らなければならぬ。危険物を積載したタンカーが伊良湖水道を通行する場合は、事故をおこさないようにするため、他の船は伊良湖水道に入ることにはできない。それくらい、伊良湖水道は、とても狭い場所、安全に船が通行するためには、たくさんの船が相互に

安全あんぜんを守りながら、管制官かんせい官の誘導ゆうどうに従したがうことが大切たいせつなところだ。

東京湾とうきやうわんは、湾口わんこうは狭いものの、車の運転うんてんに例えようと、中央分離帯ちゆうおうぶんりたいのある片側かたがわ二車線程にしやせんほどの幅はばがあるというのだから、伊良湖水道いらくすいどうの狭さは歴然れきぜんだった。

そのため、長さ五十メートル以上の大きな船ふねが伊良湖水道いらくすいどうを通行つうこうするときの法ほうが作つくられ、この狭い伊良湖水道いらくすいどうの航路かうろを右側みぎがわいっぱい寄よつて、決められた一定いつていの速度そくどでブレーキをかけることなく安全あんぜんに通行つうこうしなければならぬことになっている。

大きな船ふねが伊良湖水道いらくすいどうに入はいるときと出るときは、それぞれスタートとゴールのように海うみの上うへにラインが法ほうで決められている。大きな船ふねは、必ずそのラインをちやんと正面しょうめんから九十度きやうじゅうどで入はいって通過つうかして九十度きやうじゅうどで出なければならず、斜めななの角度かくどで伊良湖水道いらくすいどうに入はいりしてはいけない。海うみの上にひかれたスタートとゴールのラインは、法ほうで決められているので、管制官かんせい官に見せてもらった海の地図ちずにもちゃんとそれぞれ線せんが引かれていた。海うみの上にスタートとゴールのラインを法ほうで決めたことで、船ふねが伊良湖水道いらくすいどうを通行つうこうするときは、他の船ふねはラインの外そとで待機たいきしているから、船ふね同士がぶつかる事故じこを防いでいる。

また、長さ五十メートル以上の船ふねは、一週間いっしゅうかんくらい前までに伊勢湾海上交通センタいせわんかいじやうつうーに伊良湖水道いらくすいどうを通行つうこうすることを届け出ることになっている。届け出とでをする内容ないよう

は、船の名前や連絡先等、安全に船が通行できるために必要な情報だ。管制官は、船の通行が事前に届け出されているので、届け出の内容を見て、船が安全に伊良湖水道を行き通ることができるよう通行スケジュールを組み立て、船に通行許可の時間や待機等の情報を出すことができる。

ぼくは、管制官が船と実際にやりとりをする指令室の見学をした。指令室は、海拔六十メートルの高さにあり、とても見晴らしがよかった。指令室から海を眺めたとき、伊良湖水道のあたりの海面の高さと船が、ちょうど目線の高さと合ったように感じた。ぼくは、管制塔のフロアがいくつかあるが、指令室のフロアをここにしました理由がわかったような気がした。

管制官は、目の前に広がる海とパソコンの画面を交互に見て仕事をしていた。パソコンの画面には、伊良湖水道付近だけでなく、伊良湖岬から沖合千三百キロメートルくらいまでの船がどこにいて、どの方向へ進もうとしているかが映し出されていた。とてもたくさんさんの数の船が画面に映し出されていて、ぼくは驚いた。

ぼくが、管制官に、一日の船の数を聞くと、鳥羽と伊良湖を行き来するフェリーや漁船を含めると、海を行き通る船は四百から五百程いることを教えてくれた。ぼくは、管制官が、とてもたくさんさんの船が海の上を動いている中で伊良湖水道を往來する大きな船の誘導をしていることを、すごいなと思った。

管制官は、ぼくに、パソコンの画面を指さしながら、小さくても大きくても、船にはリーダーが積まれているから、リーダーが発信する情報を伊勢湾海上交通センターの管制塔が受信して、それを指令室のパソコンの画面に表示しているのだと教えてくれた。

そして、管制官は、リーダーからパソコンに映し出された情報を見て、目の前の伊良湖水道の船の航行の安全だけでなく、太平洋や三河湾、伊勢湾での事故を未然に防ぐためにも広範囲のリーダーをちゃんと見ることも大切な仕事だと教えてくれた。

なぜなら、船には車のようなブレーキはないから、船が止まるためにはエンジン逆回転させなくてはならないが、急には止まらないこと、大きな船になればなるほど小回りが利かないし急には止まらないこと、大きな船と小さな船の衝突をさけるには、小さな船に大きな船が近づいている危険を知らせて早めに航路を変更してもらうことが事故を未然に防ぐことになるからだ、等と教えてくれた。

ぼくは、船に連絡を取るといっても、事前に伊良湖水道を通行するために連絡先を届け出ている大きな船でなければ連絡先をどうやって知るのだろうとふしぎに思った。管制官は、船と連絡をとるには、電話をかける以外に無線を使うと周波数が合致するところがあるから連絡が取れるのだ、と教えてくれた。話をするときには、

日本語だけでなく英語も必要だよ、とも教えてくれた。ぼくは、初めて知ることばかりで、驚きの連続だった。

ぼくが指令室の見学をした後、いよいよバックヤードツアーが始まった。

最初に、管制塔の地下へ階段で降りた。ここには、管制塔が毎日二十四時間その使命を果たすため、重要なものがいっぱいまつていた。当然、写真撮影はNGだ。ぼくは、今回のツアーで初公開となったとても重要なところを幸運にも抽選で選ばれて見学でき、最高に感激した。管制官が、ぼくに、一つ一つ丁寧にその機能や役割等を教えてくれた。ぼくは、管制官から説明を聞けば聞くほど、そのすごさに圧倒された。詳しいことは、シークレットだ。

管制塔の地下での見学の後、指令室のあるフロアまで戻ってから、管制塔の屋上までの階段を上った。階段数を一〇八段と聞いたときは登れるかなと思っただけ、実際に登ってみるとあつという間だった。ぼくは、正面から両手で手すりにつかまって階段を登ろうとしたけれど、足の裏が全部階段につかなかったので、少し横に足を向けて上った。幅の狭い階段だったので、上り下りのときは足を踏み外して落ちないように、しっかりと手すりにつかまって上った。

上り終えたところから見た景色は、最高だった。三六〇度海と空が見えた。神島に向かって立った時、ぼくの右手側にはライトブルーに輝く三河湾と伊良湖岬

の道の駅クリスタルポルトがあつて、鳥羽へ向かう伊勢湾フェリーが港に泊まつて
いるのがとても小さく見えた。ぼくの右斜め前の方向には、知多半島が見えた。

ぼくの左手側にはコバルトブルーに輝く太平洋がどこまでも広がっていて、
伊良湖水道を通行するため待機しているであろう大きな船が見えた。

ぼくの背中側は富士山が見える方向なのだが、あいにく雲が広がっていて、
富士山を見ることはできなかった。

ぼくの足元には、伊良湖岬の先端にある昭和四年に建てられた白亜の灯台が見え
た。この灯台は、高さが五メートルくらいあるのだが、まるで米粒のように小さ
く見えた。ぼくの立っているところがとても高いところだということを痛感した。
今日はとてもいい天気で風も強くなかったから、管制塔の屋上に上がって景色を眺
める体験をでき、ぼくはとても幸運だと思った。だけど、天気が悪くて風が強い日
には、この場所はとても高いし、風をさえぎるものがないから、管制官が仕事をす
るのはとても危険だと思った。

管制官に聞くと、海上からぼくが今立っている屋上までの高さは、海拔九十メー
トルあるということだった。ぼくは、灯台が小さく見えるはずだ、と思った。

ここは、ぼくが少し前に見学していた指令室のフロアから三十メートル上ったこ
とになる。三十メートルも高さが違うと、こんなにも見える景色は違うのか、と思

うほど、まばゆいばかりの太陽の光を受けた太平洋と伊勢湾と三河湾の海が一面キラキラとぼくの足元に輝いていた。砂浜で太陽の光を受けた海を見たときよりも、指令室で海を見たときよりも、はるかに、まぶしかった。

伊勢湾海上交通センターの管制塔の上には、海の上の船から見えるように、大きな電光掲示板があった。これは、近くにいる船に大きな船の動きを教えてくれるものだ。例えば、大きな船が太平洋から伊良湖水道に入る北へ向かう航路のときにはN、伊良湖水道から太平洋へ出る南へ向かう航路のときはSというように、船が北へ動くのか、南へ動くのかを表示して知らせることもしていた。

ぼくが階段を上る途中、いくつか途中で外に出る通路があった。管制官に聞くと、この通路は、船から見えるように設置された電光掲示板にあるたぐさんの電球が切れて交換作業をするときに通るのだと教えてもらった。

管制塔の屋上までの階段はとても急で、毎日の点検作業はとても大変だと思った。それに、電球を交換する場所は海上から九十メートルもある高いところだし、岬の先端にある高台の上の管制塔だから風の強い日の方がきつと多いはずだ。それでも、船の通行の安全を守るために、毎日休むことなく、二十四時間、メンテナンスをしてくれている管制官がいることを、ぼくは初めて知った。

ぼくは、海が好きだ。三河湾は波が静かで海水浴を楽しめるし、太平洋は波が高

いけれど波打ち際を走る楽しさがあって、どちらも好きだ。今までは、海を楽しんでいたときは、海の色（いろ）の美（うつく）しさ、澄（す）み渡る空（そら）と青（あお）い風（かぜ）に心（こころ）をひかれ、太陽（たいやう）の光（ひかり）に熱（ねつ）せられた白（しろ）い砂浜（すなはま）を走り抜（ぬ）ける快感（かいかん）、波打ち際（なみうちぎわ）で足（あし）を濡（ぬ）らして走る楽し（たの）さ等に海（うみ）で過（す）す心地（こころち）よさを感じ（かん）じていた。

でも、ぼくは、管制官（かんせい官）から海（うみ）の上（うへ）には法（ほう）があること、管制官（かんせい官）は船（ふね）が安全（あんぜん）に通行（つうこう）するためにいろんな仕事（しごと）をしていること等の説明（せつめい）を聞いて、海（うみ）の上（うへ）には法（ほう）で決（き）められた区域（くいき）やライン（らいいん）が実（じつ）はたくさんあるのだ、と知（し）ったことから、何も知（し）らなかつたときよりも、法（ほう）という眼鏡（めがね）をかけて海（うみ）を見ると、今（いま）までとは違（ちが）った景色（けしき）が見（み）えるようになった感（かん）じがした。

例えば、ぼくは、海全体（うみぜんたい）を眺（なが）めるときは「海上衝突（かいじょうしょうつ）予防法（うぼうほう）」があつて海（うみ）の上（うへ）で船（ふね）が衝突（しょうつ）しないように交通（こうつう）ルールがあること、伊良湖水道（いらくすいどう）のように大（おお）きな船（ふね）が安全（あんぜん）に通行（つうこう）するためには特別（とくべつ）なルールが必要（ひつよう）だということで作（つく）られた「海上交通安全法（かいじょうこうあんぜんほう）」があること、船（ふね）が港（みなと）で通行（つうこう）するときのルールとして「港則法（こうそくほう）」があることを知（し）った。これは、管制官（かんせい官）が、見学（けんがく）の最初（さいしょ）に、スライドで大（おお）きな画面（がめん）に映（うつ）してぼくに教（おし）えてくれたことだ。

管制官（かんせい官）がぼくに見（み）せてくれた伊良湖水道（いらくすいどう）を中心（ちゅうしん）とした海（うみ）の地図（ちず）には、海上衝突（かいじょうしょうつ）予防法（うぼうほう）が適用（てきよう）されるところ、海上交通安全法（かいじょうこうあんぜんほう）が適用（てきよう）されるところ、港則法（こうそくほう）が適用（てきよう）さ

れるところ、のそれぞれがわかるように、線や言葉が書かれてあった。

ぼくの住んでいる愛知県には、大きな船が行き来する港として、豊橋港と名古屋港がある。国内外から来る大きな船は、これらの法を守り、管制官の誘導で伊良湖水道を安全に通行して、豊橋港や名古屋港を出入りして荷物の上げ下ろしをしている。大きな船が安全に伊良湖水道を通行できていることは、今では当たり前のことのようになっていて。でも、これは、五十年くらい前までは、当たり前ではなかったことなのだ。そう考えると、ぼくは、ぞっとした。当たり前のようになっている海の上での安全が、たくさんの方の管制官の努力が集まってつくられていたことを思うと、ぼくの心はジーンとした。

ぼくは、豊橋港で輸出入されている自動車や名古屋港で輸出入されている食品等がぼくたちの暮らしの中に届けられていることを、とてもありがたいことだと思つた。管制官は、海の上の船の事故を未然に防ぎ、船の通行の安全を守ることで、人の命、海で暮らす魚や鳥等の生き物の命、環境、そして、ぼくたちの暮らしをも守ってくれているのだ。

ぼくは、バックヤードツアーに参加して、管制官の仕事の大切さがよくわかつた。管制官になるには、舞鶴にある海上保安学校へ進学して、保安官として、海での仕事の勉強のほか、通信等の勉強をしなければならないこともわかつた。

伊勢湾海上交通センターの管制塔を見学できた数々の思い出は、ぼくにとって、宝物の一つになった。

ぼくは、ぼくが好きな海を同じように好きなたくさんの管制官が笑顔でぼくに海上交通のルール等をいろいろと教えてくれて、伊勢湾海上交通センターの管制塔のすごいところを見学させてくれて、とても嬉しかった。管制官の皆さん、ありがとう。

海水かいすいの力ちから 植物しよくぶつのふしぎ

立山たてやま 怜佳れいか

おおさかしりつはんなんしょうがっこう
大阪市立阪南小学校二年 にねん

夏休なつやすみに、おじいちゃんとおばあちゃんが沖縄おきなわの宮古島みやこじまに連れて行ってくれることになりました。すると、お母かあさんがパソコンで宮古島みやこじまの写しゃ真しんを探さがし始めはじめました。わたしは、きょうみしんしんで横よこからのぞきこみました。パソコンの画が面めんには、水色みずいろの空そら、エメラルド色いろにかがやく青い海あお、その海うみに生はえている木きの写しゃ真しんがありました。緑色みどりいろの葉はっぱでいくつかに分わかれた根ねっこをした木きでした。わたしは、びっくりしました。

「これ何？なんで海に木がはえているの！」

とお母さんに言いました。そうすると、お母さんが、答えてくれました。

「マングローブって言うのよ。きょうみがあるんだったら、本物を見に行く？」

「ぜったいに行きたい！！！」

ということ、マングローブを見に行くことになりました。

図書館でマングローブの本を借りました。飛行機の中で読んでいくことにしました。また、マングローブに近づいてかんさつしてみたかったので、漁業組合に電話をして近づいて見てもいいかをかくにんしてから行きました。

夏休みが来ました。飛行機に乗って宮古島に向かって飛び立ちました。飛行機が初めてなのでりくする直前が少しこわかったです。飛行機から見ると大阪の海は黒っぽい感じでしたが、宮古島に近づいてくると、エメラルド色の海が島をとりかこんでいました。この海にマングローブが生えているのかと思うと見るのが楽しみなってきました。

飛行機で本を読みました。マングローブは、熱たいやあ熱たいの川の河口など、淡水と海水がまざり合う汽水いきに生える植物のそうしようで、カニやエビ、魚貝などを育み、また、それらをえ物とする生き物にとって重要なかんきょうになっ

ているそうです。(参考①) また、マングローブは、体に入った塩分を古い葉にためて落葉させたり、根で水を給水するときに塩分が入らないようなしくみにしたり、海水の塩分になえる特別な仕組みがそなわっているそうです。(参考②)

宮古島に着きました。着いてすぐにレンタカーに乗って、マングローブを見に行きました。車を下りると、太陽がまぶしくてとてもあつかったです。海の前にかいだんがあつてマングローブが見えません。とてもわくわくしながらかいだんを上がって海を見下ろすと、そこには、きれいな海が待っていました。なんと海水がありませんでした。土が見えていました。そこには、根っこが何本にもわかれて、タコの足がふくざつにからまったような、マングローブがいっぱいならんでいました。ヤエヤマヒルギという種類のマングローブでした。マングローブは想像以上の大きくてびっくりしました。その大きさはわたしの身長に二倍くらいあったので二百四十センチメートルくらいでした。葉っぱはこい緑色でした。木のおぼけのような形で、根っこが足のようにもぞもぞと動き出しそうでした。本で調べたら、し柱根と言うみたいです。(参考②) また、白っぽい小さな花もついていました。豆みたいな形の二十センチほどの種も見ました。足元を見てみると、石と石の間に小さな魚が見えました。また、カニもいました。

近くにある別のマングローブも見に行きました。そこも、海水がありませんでし

た。そこにもヤエヤマヒルギがいっぱい生えてありました。砂地には、穴がいっぱい開いていて、ハゼの仲間やカニがいっぱいいました。しばらくかんさつしていると、『カン。カン。』と、なりひびくような音がしました。周りを見回してみても鳥ではなさそうです。静かなところにその音だけがひびいていました。その日のマングロープはそれで終わりにしました。

宮古島に行く前に、せっかく行くから、宮古島のマングロープについて教えてくれるところはないかと考えました。どこにきいていいのかわからなかったから、市役所に電話して聞いてみました。市役所の教育委員会でわかるということをおしえてもらっていました。次に市役所に行ってみました。宮古島は、さんごしょうがもりあがってできていて、山や大きな川もない。宮古島のマングロープは、河川ではなく、わき水から発達するマングロープ林で非常にめずらしくて、き重なものということでした。(参考③)

ホテルにもどってから、ずっとマングロープが気になって、『マングロープの根っこも見たかったけど、わたしが見たかったのはこれじゃない。』と思いました。それから、宮古島にいる間は毎日連れて行ってもらいました。時間もかえて見に行きました。それでもなかなかエメラルドグリーンの海とマングロープを見ることができませんでした。とうとうお昼から帰る日の四日目になってやつとのことです。

海水がみちているところを見ることができました。『やっと、見れた。』と、思いました。海水は、マングローブの根っこの半分くらいのところまでできていました。小さい魚が群れであちこちに泳いでいました。マングローブの付近は少し茶色にごっていましたが、エメラルドグリーンの海に、緑色の葉っぱがとてもきれいでした。海に木が生えている不思議な光景でした。わたしの中の『ふつう』という考え方が、ひっくり返ったしゅんかんでした。

飛行機で帰りながら思いました。マングローブは、特別なしくみがあるから海水でもいきていけるのは分かったけど、ほかの植物は海水だと本当にだめなんだろう。一つ、ぎ問が出てきました。

家に帰って考えました。お母さんのしゅみでブルーベリーやブラックベリーを育てているけど、あげているのはふつうの水。小学校では、あさがお、チューリップを育てたけど、ふつうの水をあげました。ふつうの水を海水にかえたらどうなるのか。わたしの予想では、海水だとかれるのではないか。または、海水がうすいとかれないのかもしれないと考えました。

まずは、図書館でししよさんに聞いてみました。ししよさんにおねがいたところ、「え、ふつうかれるんじゃないですか。海水で育つ植物なんてあるんですか。お

時間じかんをください。」

と言いわれました。何日なんにちかしてからし料りようが用意よういできたと電話でんわがありました。たくさんのし料しりようを用意よういしてくれました。読よんでみると、日本の多おほくのう家かさんのことが書かかれていました。玉ねぎ、ネギ、イネ、トマト、キャベツ、ブロッコリー、ナス、ミカン、イチゴ、キウイなど、たくさんの植物しょくぶつが、海水かいすいや塩しおを利用して育そだてられているそうです。海水かいすいをうすめてあげたりそのままの状態じょうたいであげていました。病氣びやうきが少すくなくなったり、身みが引きしまつて、あまみがまじたり、おいしくなるそうです。(参考④)

でも、信じられなかったので、『やってみよう。』と思おもいました。ちやうど家いえの外そとにはお母かあさんが育てている野菜やさいが見みえました。ねぎ、かぶら、ほうれん草そう、にんじん、ブロッコリーがありました。

『海水かいすいが無いからどうしようかな。』と思おもいました。海水かいすいの塩分えんぶんは、約三〇三・五パーセントで、わたしたちがふだん使つかう食塩しょくえんと同じ塩化ナトリウムという成分せいぶんでできているそうです。(参考⑤) それなら家いえで使つかっている塩しおを使つかって海水かいすいを作つくればいいんじゃないと思おもいました。お母かあさんに、言いいました。

「お塩しおちょうだい。海水かいすいで植物しょくぶつが育そだつかやってみたいの。お母かあさんの育てている野菜やさいも使つかってもいいよね。」

「これでいい？」

お母さんが塩を出してくれました。見てみると、なんと沖繩の海水から作られた塩でした。これで沖繩の海水が作れると思いました。二リットルのペットボトルで海水と同じこさ三パーセントで作ることにしました。塩をはかっていくと、はかりの上はたちまち白い山ができました。すごい量でびっくりしました。これだけ塩を使うと植物ってかれるんじゃないかと不安になりました。なので、もう少しすめた一・五パーセントの物も作ることにしました。三パーセントの物と、一・五パーセントにうすめた物とふつうの水の三種類をあげてくらべることにしました。わたしの予想は、三パーセントの海水をあげた野菜はすぐにダメになると考えました。一・五パーセントの物はその次にかれるという予想です。

実験を始めるとき、それぞれの植物はちやうど、ふたばが出てきたところでした。土がかわくたびに水やりをしました。予想とちがつて、海水三パーセントの物はなかなかかれませんでした。これつという変化はありませんでしたが、一週間くらいすると、まず三パーセントの海水をあげたほうれん草の元気がなくなってきました。また、三パーセントの海水をあげたネギも成長がおくれてきました。成長がおくれるだけで、今のところかれるような様子はありません。一・五パーセントの海水をあげた物は、ほうれん草の成長がおくれているだけで、他はふ通の水をあげた物といっしょに成長しています。実験をしながら図書館の本も読み進めました。海水をそのまま飲み水やのう作物

に使えないのは、あまりにも塩分^{えんぶん}のう度^どが高^{たか}すぎるからだそうです。(参考⑥)なるほど、だから三パーセントの海水^{かいすい}の物は少し成長^{せいちょう}がおくれてきたのかもしれない。また、海水^{かいすい}はどんな作物^{さくもつ}にも使^{つか}つていいというわけではなく高い塩分^{えんぶん}のう度^どに弱いトウモロコシ、ダイコン、インゲン、ニンジンなどにはだめで、はんたいにアスパラガス、ネギ、トマト、ナス、ホウレンソウ、かんきつるい、リンゴ、ブドウなど、塩^{しお}に強い作物^{さくもつ}にはむいているそうです。(参考⑥)

海水^{かいすい}に對^{たい}してマングローブのように特別な仕組^{しく}みをもつてない植物^{しよくぶつ}でも、種類^{しゆるい}によつては海水^{かいすい}でも育^{そだ}つことが分^わかりました。また、海水^{かいすい}をあげること、かれるどころかおいしくなるなんて思^{おも}いもしませんでした。『海水^{かいすい}って、植物^{しよくぶつ}ってすごい!!』つて思^{おも}いました。

(参考①) マングローブの木の下で、横塚眞己人 株式会社小学館

(参考②) マングロープ生態系探検図、馬場繁幸 偕成社

(参考③) 綾道 自然・植物編、四島・西辺コース、宮古島市教育委員会

(参考④) 現代農業 平成19年8、農文協

(参考⑤) なりたち・しくみがよくわかる できた図鑑、PHP

(参考⑥) みんなが知りたいシリーズ④海水の疑問50、上ノ山周、成山堂書店

おいぞめのたい

ちばりつおぐらしょうがっこう いちねん
千葉市立小倉小学校一年
まつ くま ゆい
松隈 唯

九月くがつにおとうとのなおくんが生まうれました。わたしはともうれしくて、大おおきくげんき気にそだきてもらいたいなとおもいました。十二月じゅうにがつになるとなおくんはよくわらうようにななって、生まうれてすぐのときよりもつとかわいいくなりました。生まうれて百ひゃく日たたって、おいぞめのおいわいをすることになりました。おいぞめは、あかちゃんあかしやうが一生いっしょうたべものにこまることがないようにするために、あかちゃんあかしやうの口くちにたべものを

ちかづけてたべるまねをするおいわいだとおかあさんがおしえてくれました。

おいわいのためにわたしのいえのちかくにあるおさかなやさんで、たいをたのむことにしました。おいぞめの日、おさかなやさんにいくとてんいんのおねえさんがたいをよいしてくれていました。そしておいぞめにたいをたべるいみをおしえてくれました。たいは「めでたい」といういみがこめてあつてたいのいろがあかとしろなことも、えんぎがよくておいわいにむいているそうです。そして、あたまからしつぽまであるたいは、さいしょからさいごまでといういみがあつて、ながいきできますようにというねがいがかめられているということをしりました。

いえにかえつて、おいぞめのじゅんぴをしました。小さなおさらにおせきはんやおすいものをよそいました。小さなおぜんにたくさんのおもものをのせて、おままとのようでした。その中でたいだけがとても大きくてりつぱに見えました。

わたしはなおくんの口にたいをちかづけました。なおくんはにこにこしながらよだれをだしてわたしのほうをみました。

「たいは、おめでたいっていみなんだって。ながいきができるんだって。」

わたしはたべさせるまねをしながらなおくんにおしえてあげました。

おいぞめのあとおばあちゃんがたいを、たいめしにしてくれました。たいのほねをやいてとっただしでごはんをたいで、みをほぐしてくれました。おばあちゃんが

くつてくれたたいめしはとてもおいしくて、みんなえがおになりました。

なおくんのおくいぞめはぶじにおわりました。おいしいたいの力^{ちから}で、なおくんが太^{おお}きくげん気^きにそだつてくれることを、わたしはねがっています。

おさかなつりたい

若狭早

えひめだいがくきょういくがくぶふぞくしょうがつこう
愛媛大学教育学部附属小学校 一年
いちねん

ぐいつ、ぐいぐいつ。うみにむかって、つりざおがおもいきりひっぱられる。

「これは大^{おお}ものだ！」

ぼくがゆめ見る^み、おさかなつりはこんなかんじだ。

ぼくのはじめてのおさかなつりは、三^{さん}さいのふゆだった。おとうさんおかあさん、そしておじいちゃんといっしょに、せとないかいの「さくらいかいがん」までいった。とてもきれいなこのうみで、大^{おお}きなおさかながつれるといいな。

つりざおのじゅんぴをしてくれたのは、おかあさん。おかあさんは子ども
「なげづり」が大^{だい}すきで、おじいちゃんとまいしゅう、うみにかよっていたそう
つりのえさを出^だしてくれたのは、おじいちゃん。うにょううにょうとくぐ
カイを^み見て、そつとはなれたのはおとうさん。なんだかこわがっている。そう、
おとうさんはこわがりやさんだった。だから、えさをつけるのはおかあさんのし
ごとになった。おかあさんはずっとうごいてるゴカイをつまむと、さつとつり
ばりにつけた。

「かつこいいね。ありがとう。」

おとうさんがおれいをいって、おかあさんからつりざおをもらった。これでおさ
かなつりのじゅんぴができた。

ビュビューン、と「しかけ」をなげる音^{おと}。

「早^{そう}ちゃんがもうちょっと大^{おお}きくなったら、なげられるようになるけんね。」

そういつて、おじいちゃんがつりざおをわたしてくれた。つりざおはおもかつた
けれど、つり糸^{いと}をまくリールはかんたんにまわせた。

くるくる、くるくる、ぐぐつ。

「やったあ、どんなおさかなかな？」

ばくはわくわくして、いそいでリールをまわした。二十^{にじゅう}かいくらいまわしたら、

しかけがもどってきた。つりばりにかかっていたのは……かいそうだった。おさかなじゃなくて、ざんねん。

おかあさんはおとうさんに、しかけのなげかたをおしえてあげていた。つり糸にひっつけたゆびをはなすタイミングがだいじだそう。ぼくも早くやりたいな。ビュビュッ。おとうさんもおもいきり、しかけをなげた。

「あ、もうかかったよ。大ものかも。」

おとうさんはうれしそう。つりざおからピンとのびた、つり糸はキラキラひかっている。でも、つり糸はまえじゃなくて、うしろにのびていた。

「おとうさんのおしりがつれた！」

ぼくは、びっくり。おかあさんがいそいで、つりばりをとってあげた。ぶあついズボンをはいていたから、ふくにひっかかっただけでよかった。そのあいだ、おかあさんのつりざおはおじいちゃんがつれてくれた。

かいそうがつれて、おとうさんのおしりがつれて。そろそろおさかながいいな、とおもっていたけれど、そのあとにはなにもつれなかった。さくらいかいがんにいる、ほかの人たちもぜんぜんつれないみたいだった。おじいちゃんは、
「きょうは気おんが上がらんけん、さかなもさむくてうごかんね。」

といった。そうか、おさかなもさむいときはじっとしていいのか。ぼくは、ぶ

るふるふるえるおさかなをそうぞうした。それはすこし、おとうさんににている気がした。

はじめてのおさかなつりで「ぴきもつれなかったから、こんどはおとうさんおあさんが「つりぼり」につれていってくれた。

つりのえさは、小さなおだんご。ゴカイみたいにくぐくえさじゃないから、おとうさんもつりばりにつけることができた。

ビビビッ。つり糸を入れると、でん気がはしたみたいにつりざおがひっぱられた。こんなにすぐ、おさかながかかるなんて。ぼくがあわてっていると、おあさんがつりざおをひっぱってくれた。

「つれた！」

はじめてつれたおさかなは、ニジマス。つやつやしていて、とてもきれい。二かい目のおさかなつり、大せいこう。

つったニジマスは、おみせの人がしおやきにしてくれた。つやつやからパリパリになったニジマスに、ぼくはかぶりついた。あつあつで、みがよくほくしていた。「ここもおいしいよ。いのちをまるごといただくうね。」

おあさんにいわれて、ぼくはニジマスの目もたべた。コリコリしていて、おいしい。つったおさかなのいのちを、ぼくはしっかりあじわった。ごくん、とのみ

こむと、なんだかおなかに力ちからがわいてきた。

あたたかくなったら、ぼくはまた、さくらかいがんでおさかなつりにちようせんする。キスやタイ、ハゼなどがつれるらしい。こんどこそ、大おおものをつつておいしくたべたい。

明日の能登あしたの

坂本孝仁
美馬市立江原南小学校 六年
さかもと たか ひと

能登半島の先端「緑剛埼灯台」に行ってきた。珠洲市の「狼煙」という場所にあるのだけれども、最初読めなくなつて、

「おおかみけむり、つて何？」

と父さんに聞いてしまった。

途中道がうねうねうねうね。上や下、右や左に曲がついていた。ガードレールが崩れているところもあった。千里浜も通ったけれどもそこは何もひがないような

様子^{ようす}だった。そして、輪島^{わじま}の朝市^{あさいち}のあったところにもよつてみた。ここは夏^{なつ}も行^いつたけれども、全然^{ぜんぜん}変わ^かわっていないかった。何も^{なに}ないところが田舎^{いなか}のいいところですよ、というのを聞^きいたことがあつたけれども、それどころじゃなかった。何も^{なに}なさずぎて、何も^{なに}変わ^かわっていないくつて悲^{かな}しくなつた。町^{まち}の真^まん中^{なか}から海^{うみ}まで見^み渡^{わた}すことができたけれども、それは悲^{かな}しい風景^{ふうけい}だ。

途^{とちゅう}中のスーパ^ーで「出張^{しゅつちやう}、輪島^{わじま}の朝市^{あさいち}」というのがあつたので少^{すこ}し安^{あん}心^{しん}した。お昼^{ひる}ごろについたので、すっかり売^うり切^きれていたのでみんな買^かつてくれているからよかつた、と思^{おも}つた。新^{しん}鮮^{せん}な魚^{さかな}、という文^{もん}字^じがあつたので、ちゃんと漁^{りよう}にも出^でられるようになったのかと思^{おも}つた。

そこから二時間^{にじかん}ぐらいかけて珠洲^{すずし}市^しに着^ついた。道^{みち}はぐねぐねが続^{つづ}いていた。すれ違^{ちが}うのは工事^{こうじ}用の車^{くるま}やトラク^ク、自衛^{じえい}隊^{たい}の支^し援^{えん}の車^{くるま}ばかりだつた夏^{なつ}とは違^{ちが}つて、ちよつとは遊^{あそ}ぼうという気^き持^もちもあるみたいな車^{くるま}があつたので、全然^{ぜんぜん}変わ^かわっていないのではな^{おも}いと思^{おも}つた。それでも、能^の登^{のぼ}に來^こないで、と二〇二四年^{にせんにじゅうよねん}の正月^{しょうがつ}に言^いわれたことがひつかかつているような氣^きがした。車^{くるま}のナンバ^ーも石川^{いしかわ}、富山^{とやま}、福井^{ふくい}、長野^{ながの}、新潟^{にいがた}、ぐらいしかなかつた。

僕^{ぼく}はまだ、小^{しょう}学^{がく}生^{せい}で何^{なに}も助^{たす}けられることはない。できることは自^じ分^{ぶん}の目^めで能^の登^{のぼ}半島^{はんとう}を見^みて、友^{とも}達^{たち}に教^{おし}えてあげて、

「いいところだから、みんな、いってみないか」

と宣伝せんでんするくらい。

それと、何回なんかいも能登のとに僕ぼくも行くことくらい。それで、能登のとのお土産屋みやげやさんで買い物ものをすること。今回は魚醬ぎょしょうを買かった。能登のと最先端さいせんたんの宿やどというところにとまって、おいしい魚さかなを食たべさせてもらったけれども、そこで使つかわれていた醬油しょうゆが魚醬ぎょしょうで、とても味あじがよかったから家いえでも、どうしても食たべたくなつたから。

もったいないから、ちよつとずつなめている。ぺろり、ちろり。ごくり、と飲のんだらだめ。醬油しょうゆは沢山たくさん飲のんでしまうと人間にんげんは死しんでしまうから。せつかく能登のとの人ひとたちが作つくってくれて、おいしくしてくれたもので悲かなしい思おもいをさせるのはだめ。

お魚さかなもおいしい。能登のとの魚さかなはとってもおいしい。そして、「祿剛埼灯台ろくごうさきとうだい」から眺ながめた朝焼あさやけはとってもきれい。地震じしんであつちこつちくずれてしまった能登のと。家いえの中なかに車くるまがつつこんで、今いまもそのままだ能登のと。田んぼが泥水どろみずと木の枝えだやごみにうもれたままの能登のと。そんな能登のとにも明日あしたはちゃんと来きている。

海とびわこ

梅崎みなと

あかしりつあかししょうがっこう 二年
明石市立明石小学校 二年

ぼくはこの春、しがけんから明石市へひっこしてきました。しがけんには、日本
で一番大きなみずうみであるびわこがあります。ぼくは、よくあそびに行っていました。
した。およいだり、ヨットにのったり、船でびわこにうかぶ島へ行ったりしました。
そしてびわこには、「うみのこ」という船があります。ちなみに「うみのこ」は、
しがけんの小学五年生がびわこの勉強をするための船です。びわこは海でもないの
に、そのよび方はへんだとぼくは思っていました。びわこでは、船といえは「うみ

のこ」でした。おおみまりんやよつともありますがよくしられているのが「うみのこ」でした。

夏休み、明石にきてはじめて海に行ってきました。ぱつと見たかんじはびわことそっくりなので、びわこを「うみ」とよぶ気もちも、すこしわかる気がしました。びわこと海の大きなちがいは、びわこでは、水を見ると小さな魚がみえるぐらいでしたが、海では水を見ると大きな魚や小さな魚がいたことです。そして、びわくりしたことは、海の水を飲みこんでしまうと、思っていたいじょうにしょっぱかったことです。しょっぱいのは、頭では分かっていたけどびわくりしました。びわこと海の同じところは、どんどんふかく行くたびにさむくなるところです。ひこねにすんでいたので明石の船のことは、あまりわからなかったのでしたらべてみると、コンテナ船やタンカー船、小がた船が海を通っていることが分かりました。

八月十五日に船であわじ島に行きました。きつぷは、大人六百円、子ども三百円でした。きつぷを買ってすぐ船にのることができました。船にのってしゅっぱつしてすぐに、とう台が見えました。「夜の海は、くらいから船が帰ってくる時に光っているとう台をめじるしにするんだ」とお父さんがおしえてくれました。びわこよりのなみははやく、船のスピードもはやかかったです。船にのって五分ぐらいで明石海きょう大はしが見えました。合計十五分ぐらいであわじ島につきました。帰りは、

雨がふったあとなので明石海きょう大はしに、にじがかかっていた。こんなことめったにないのに、今日見られてラッキーでした。写真をとったけどカメラをもってくるのをわすれていたことにきがついて、がっかりしました。またいつか、こんなきせきがおこったらいいなと思いました。

ぼくは、これから海のことを知って、びわことのちがいをみつけて、もっといろいろくらべてみたいです。

「海のバンキシヤ!2024」 に参加して

あかしりつえいがしましうがっこう ごねん
明石市立江井島小学校 五年
まつ した たい ち
松下 泰知

ぼく
僕は、8月に行われたイベント、「タコの漁獲量減少の謎に迫れ! 海のバン
シヤ!2024」に参加しました。
いちにちめ
一日目は、明石浦漁協で今の海の現状を聞いたりセリの見学をしたり、干しだ

こづくりなどを体験しました。また、海水を採取してプランクトンを観察したり、大蔵海岸で磯浜の生物の観察をしたりしました。

一日目の午前は海の現状の学習と干しだこづくりをしました。今の海は、青く透き通っていて、栄養が少なくなっている海です。海にはリンや窒素、ケイ素などの栄養が溶け込んでいます。昔は多すぎてプランクトンが増えすぎ、赤潮が多く発生するなど栄養過多が問題となっていました。原因は海に流れ込む水だったため、それをきれいにしようとしたところ逆に美しくなりすぎ、海に必要な栄養までもが不足してしまったのだそうです。栄養は、バランスよくあることが大切だということ学びました。

干しだこづくりでは、明石のタコを使い、かみ応えのある干しだこを作りました。今回は一から作りました。干すことにより、長く保存できるようになり、うまみも増します。

僕が通っている江井島小学校では3年生の時に授業で干しだこを作ります。干しだこがたくさんぶら下がっているのは江井島の昔からの風景というのを知っていました。改めて昔の人はいろいろな知恵を持っていたのだなと感じました。生きているタコをつかむことから難しく、途中ですみ袋を破裂させてしまいました。出来上がった時には達成感を得ることができました。最後まで、できてよかったです。

一日目の午後には、海底にあるプランクトンを採取し、どのようなプランクトンがあるかを、顕微鏡で観察しました。プランクトンが動き回っていて、顕微鏡でおいかけるのが大変でした。よく見てみると、プランクトンにも様々な種類がいることがわかりました。思っていたよりもプランクトンは少なく、昔はもっといたのではないかと感じました。

また、底泥の生物の調査もしました。ヤドカリや貝がいたので、泥の中には生き物たちにとって安心できる場所ではないかと感じました。この調査中に、プランクトンが少なくなってきたこと、それによりいかなごなど元々いた生物がいなくなってきたのではないかと考えました。いかなごは砂にもぐって夏眠する性質があるので、海底の状態も大きく関係しているのではないかと考えました。

セリの見学では、知らない言葉が飛び交っていました。知らない言葉とは、魚屋さんの番号などだそうです。セリに出ていた魚はブリや小魚などでしたが、昔と比べて量が減ったそうです。明石市のホームページで調べたところ、明石市の2011年からの十年間の年間漁獲量は、一番多かった2016年では5033トンでしたが、2020年には半分以下の1986トンまで減少していました。船びき網漁によるいかなごの漁獲量の減少が全体の漁獲量減少に大きく影響しているということです。確かにここ数年、いかなごが獲れなくて値段が高いというニュースば

かり見ています。いかなごのくぎ煮やかまあげは春の味です。食べられなくなってしまうと寂しいではすまいと思いました。

次に向かった大蔵海岸の磯浜では、海にいる生き物などを観察しました。僕はエビを捕まえました。他の班の子たちは、カニやスズメダイの稚魚も捕まえていました。磯浜には危険な生物もいました。でも、生き物の数は思っていたより少なかったです。磯浜の魚たちも、海の栄養不足で減っているのかなと思いました。

その後バスで移動した淡路島では、タコが減少している謎に迫りました。タコが減少している理由は、海のごみ問題や、水温が上がったり、エサが少なくなったりしていることかなと思いました。他にも、タコ釣りの人たちによる乱獲や、産卵場所の減少などが理由としてあげられるそうです。

対策として明石の漁師さんたちは、産卵用のたこつぼを海に投入したり、稚ダコを放流するとポイントがもらえるタコマイレージシステムなどをつくったりしているそうです。僕も小学校でタコつぼに絵を描いて海に投入してもらいました。母ダコがこのたこつぼを気に入って卵を産んでくれますように、と思いながら絵を描きました。こういった取り組みを通じて漁業関係者ではない人たちにも理解を広げていくことが大切なのではないかなと思いました。

二日目は、かいぼり体験をしました。かいぼりとは、米や作物などを育てるため

に作られた、ため池の泥などを海に放流する作業です。ため池の泥は臭く、足が抜けなくなるなど大変な作業でした。しかし、ため池の泥などには栄養が多く含まれており、その泥を海に流すことで、栄養を海にいきわたらせる大切な作業だそうです。かいぼりのはじまりは今から2500年前ともいわれています。しかし近年は、高齢化などが進んでおり、あまり実施されなくなっていました。

兵庫県淡路県民局洲本土地球改良事務所の尾崎さんは、「かいぼりのことをもっと広めてくれるとありがたいです。」とおっしゃっていました。

かいぼり体験が終わると、二日間で体験したことをグループで新聞にまとめました。私たちの班の題名は、「HELP! HELP!」です。この題名にした理由は、タコはエサがなくて困っているのではないかと思ったからです。この体験を通じて、これから海のこともっと理解し、守っていかねばならないと感じました。お正月には、おせちと鯛を食べました。僕は、このおせち料理や鯛をずっと食べ続けたいと思います。そのためには、海を守っていかねばなりません。海を守ることは、日本の文化を守ることにつながるのだと思います。

オーベイとたたかった海

ふなばしりつたきのいしょうがっこう よねん
船橋市立田喜野井小学校 四年

た な か ゆ づ き

田中 佑築

一昨年、夏休みの初日、ぼくは家族全員で勝浦市の海に行くことになった。おかあさんがなるべく日の当たらないところがいいと言ったので、理想郷というところに行くことになった。理想郷は崖で囲まれて影で包まれている場所である。車で行き、着くまでに兄弟げんかを何度も繰り返した。いつもよくケンカをするのが当たり前だが、今日は特に激しかった。ぼくは体を痛められたり、意地悪されたりするとすぐ怒るタイプである。車の中はぼくたちにとっては狭く、頭を何度もぶつけるたびに、不満が胸の中に積もっていった。でも、それを表に出さず、じっと飲み込んでいた。

勝浦が見えると、みんな大満足で、シートベルトが外れてしまうかというくらいに暴れてはしゃいだ。海に着くとすぐに車を降りた。太陽がガラガラと輝き、空は青一色に包まれていた。車内では黒いカーテンのようなものを閉めていたため、外に出ると太陽の光が体いっぱい降り注ぎ、元気が湧いてきた。

長い間歩いていくと、平たい砂浜があり、海は小さく、周りは崖の壁で覆われていた。影がたくさんあり、ぼくはここが理想郷なのだと思った。ぼくとお兄ちゃんは一歩最初に走って海の近くに行き、ぼくはヤドカリを見つけ、お兄ちゃんはヒトデを見つけた。そのあと、お兄ちゃんが見つけたヒトデが狭いところへ入ってしまった。右側には正方形に近い四角い湖があり、その周りには丸い湖がいくつも並んでいた。ぼくはその形のおもしろさに驚いた。

石の上を歩いているとき、ぼくは足を滑らせてバランスを崩し、お尻が水面につきそうになったが、なんとか立て直した。それを見ていたお母さんが「あぶねー」と一言。ぼくはドキドキしながらも、また歩き始めた。

その後、水着に着替えてすぐに海に入った。海と陸の温度は全く違い、足を入れただけなのに首まで冷たさを感じて驚いた。そのまま陸から離れた場所に進むと、カニや小さな魚がたくさんいて、ぼくら家族はまるで生き物博士のように次々と発見を重ねた。ヒトデや不思議な色の魚も見つけ、ぼくは何度も「見て！」と家族

を呼びながら夢中で探した。

お兄ちゃんはお網を持ち、まるで侍が刀で竹をスパッと切るように網を振り回して、五センチくらいの白い魚や、十五センチくらいの真四角で太いハサミを持ったカニを次々に捕まえていた。ぼくも負けていられないと思い、ヤドカリや貝、カニを一生懸命捕まえた。

弟は海に落ちるのを怖がり、お父さんに赤ちゃんのようにふんわり抱っこされていた。そんなとき、お父さんが「ウツボだ！」と声を上げた。ぼくは驚いて、忍者のように素早く駆け寄った。ウツボは四十センチほどの長さで、ヘビのように体をうねうねし、歯が鉛筆の先のように鋭かった。お父さんはぼくと目を合わせ、「見た！」と大発見をしたかのように言った。ぼくはびっくりしてもう一度見たが、ウツボはすでに消えていた。

お兄ちゃんもやって来たが、そのときにはウツボは姿を消していた。お兄ちゃんはお肩を落として「ガン……」と呟き、まるで枯れた葉のように背中を丸めていた。しかし、その後しばらくして、お兄ちゃんが同じ場所に行くと、「見れた！」とスキップしながらお母さんに笑顔で報告していた。

そして、ぼくが岩の近くについて「これ何？」とお父さんに聞いたら、「化石だ！」と大声で言った。ぼくはそのとき、化石採掘が好きな人の話を本で読んでいて、ちよ

うど僕も化石探しをしてみたいと思っていた。だけど、見つかるわけがないと思っていたので、それを見て「大発見だ！」と叫んだ。危ない岩の上でもジャンプしうになるほど嬉しかった。その化石は、カタツムリのようにぐるぐると巻かれて四角く、周りにはその化石を覆う線があった。近くに二十個くらいもあって、ぼくはそれを見つけたことが信じられないくらい驚いた。

そのまま海で遊んでいると、崖の壁に穴が開いていることに気づいた。その穴をのぞいてみると、向こうには青くてピカピカした海が広がっていた。ぼくは「うわー、すごい！」と声が出るくらいびつくりした。でも、そのまま見ていると波が「ざばーん！」ときて、ぼくは「わっ！」と叫びながら慌てて後ろに下がった。

夕方まで遊ぶと、近くの海岸へ行くことになった。歩いているとレンガの家のようなものがどっしりとあり、雑巾がぶら下がっていた。それを見てお兄ちゃんが「野生の雑巾だ！」と言い、みんなで大笑いした。

さらに進むと、いきなり森のような場所に出た。そこでは鳥やセミの鳴き声が聞こえ、海の近くの森の雰囲気があり、不思議に感じた。そんなことをしているうちに、あつという間に海岸に着いた。海は青緑色でどこまでも広がり、「写真では伝えきれないな」と思った。

ぼくは一番に走り海の浅い所に行き、ぼくが海で一番最初にやること。それは、

海から来た波をジャンプしてよけることだ。これが一番安全で、海でしかできないことだとぼくは思っている。そして二回目で少し強い波が来たが、それでも平気だった。弟はまだ小さいから、すぐにこけてしまう。ぼくがコツを教えても、弟は「うーん」と顔を傾けて頭をかき、まるで話を聞いていないかのようだ。まだ体の動かし方を覚えていないのだ。そのとき、ぼくと弟はとても仲が悪かった。だからぼくはすぐにムカついてしまった。でも弟はそれが楽しいのか、何度も何度もやってはこけている。ぼくから見たら「話を聞く気ないな」と思い、またイライラしてしまった。ぼくもたまにこけるが、そのとき海とぼくの顔の距離が近くなる。海が小さい石を運んで砂浜の砂とぶつかり、ちゃっちゃと音が聞こえる。まるで手で米を洗っているように聞こえた。今ではそれがキャツキャと小さい子の笑い声のようにも感じられる。

そんなことをしていると、親に呼ばれた。ぼくとお兄ちゃんはその年の運動会でソーラン節の「よっちゃよれ」という歌にのせて踊ったことがあるが、ここで踊ってみてと言われた。ちようどお兄ちゃんも同じ年に踊った経験があったので、すぐにわかった。それで音楽を流しながら踊り始めると、手の踊りの始まりは右から始まると言われた。しかし、お兄ちゃんは正しく踊っていたのに対し、ぼくは逆に動いてしまい、なんだか違和感を持ったままだった。

楽しい日ではあるが、実はぼく、今日は色々なことがあつて疲労がたまつていた。海に行く前に朝早くから夏休みの宿題をしていたり、一時間半の車の中で兄と弟と喧嘩したりした。海岸と崖の上で海を見たときも怖かったし、縄を持ちながら急な階段を下りるときには、足がぶつかりそうで怖かったりと、色々と疲れることが多かった。

だから、もういやだという気持ちを抑えたい。今日は疲れたから胸のつかえを取りたいと思っていると、たまたま弟が岩の上で謎の魔法のような言葉「オーベイ」と裏声で叫び始めた。弟はとても楽しそうで、それはまるでやまびこをしているようだった。

弟が何度もそれを繰り返していると、波が来るたびに耳をふさぎ、本気で怒った顔をしていた。それが、まるで波と闘つては負け続けているようで、ぼくには面白く見えた。

弟はその波より大きい音を出して叫んでいた。波はそれを無視するように、「ざばーん」と弟の声より全然大きい音をかましていた。それがなんだか面白くて、ぼくはさっきまであつた疲れを少し忘れた。

ちやうどそのとき、お母さんが「家族全員で一緒にやろう」と言つたので、ぼくたちも弟のまねをして大声でやってみた。腕を肩まで持つてきて、肘をまっすぐに

伸ばし、肺が破裂するほど息を吸い込んで、やまびこのように裏声で「オーベイ！」と叫んだ。海のおさかなが「オーベイ」を聞いて向こうまで泳いでいったような気がした。胸のつまりが取れて、気持ちが届いたように感じた。

ぼくにとって「オーベイ」は、もう嫌だという気持ちを伝える祓いとして使っていたが、本当は何なのだろうと気になり、作者である弟にインタビュウを試みた。弟によると、「ぼくはとても耳が良くて、海の波の音『ざばーん』がうるさくて、どうか行けという意味で言った」とのことだった。なぜ「オーベイ」にしたのかを聞いてみると、「一番最初に浮かんできたのが『オーベイ』だったから」と言っていた。

ぼくたちが大勢で「オーベイ！」と叫んだら、一時的に波が来なくなつた。「こんな奇跡だ」と思っていたら、その二十秒後に今までよりもさらに強い波が返つてきた。弟はそのまま海の浅いところにいる、大きな波に驚きながらも、耳をふさぎつつ必死で逃げていた。弟はそのとき、海に入るのが初めてだったから、少し大きい波に巻き込まれるのではないかと思っていたのだろう。

ぼくは、海が弟の「オーベイ」に従つて我慢していたが、ついに我慢できなくなり、「うわー！」と我慢していた分の力を思い切り返してきたのだと思つた。「もういいだろう。我慢したんだから」という感じでお返しのように強い波を送り返してきたように見えた。そのとき、ぼくは「この波つてちよつとわがままだな」と思つた。

ぼくは弟のおかげでストレスを解消した。違う意味を込めて言っただけで、ぼくはぼくで届いた気がしたからよかったと思っただけ。その「オーベイ」は、ぼくにとつては楽しくて気持ち良かったから、何度も言っただけ。今度は「波よ、ぜったいに来るな」と思いながら言っただけで、海はそれを無視してジャンジャン強い波が来た。ぼくが言っただけでこうなったのかと思っただけ。

正直、ぼくは波が好きだから「まあいいや」とあつさり思っただけ。そしたら、やりきつた感じに包まれて自然と笑っただけ。そしてヤドカリを見つけたたり、お父さんと浮き輪に乗って深くて遠いところまで行っただけで、海でたくさんの思い出を作ることができた。

車に戻るとき、いつもなら少し嫌な思い出を残してストレスをためたまま、不満を隠して「今日は楽しかったな」と自分にも気づかれないように嘘をついて変な気持ちで帰っていた。でも今日は、いい思い出を持ち、不満を隠さずに「今日は楽しかった」と本音を言っただけで家に帰ることができた。

仙人せん じんとの出逢で あい

おおさかしりつながよししょうがっこう ぐねん
大阪市立長吉小学校 五年
いま むら
今村 琉汰

「仙人せん にんが来たき！」「仙人せん にんが来たき！」

夜の防波堤ぼうはていで、島しまのおば達たちがコソコソばなしをしていた。ぼくは想像そうぞうして考えたかんが。
五千年ごせん ねんぐらい生いきている不老不死ふろうふしの神かみさんが奄美大島あまみおおしまにいてはるんやな。ちよつと
怖こわいけど、仙人せん にんに会あえるなんかめつたにないことやろうから、会あつてみたいな。

ぼくは、勇気ゆうきを出だして仙人せん にんに近ちかづいてみた。仙人せん にんは、半袖はんそでのシャツに短パンたんぱん、島しま
ぞうりをはいて、超ラフちやうらふなかつこうで釣つりをしていた。五千年ごせん ねんぐらい生いきている神かみ
さんにこんな事ことを言いったら失礼しつれいなかもしれないけど、見た目めは普通ふつうやなと思おもった。

急に釣りをしている仙人の釣竿の先がぐにやつと曲がり出した。仙人は、

「あたりや！」

と言った。これぞ神わざ！というぐらいの手ぎわのよさで、リールをぐるぐると回し出した。そして、いとも簡単に大きい魚を釣りあげた。ぼくはびっくりした。この防波堤でこんなに大きい魚を釣っている人を、今まで見たことがない。仙人は、魔法か何かを使って釣りをしているのかもしれないと思った。ぼくは自分の釣竿を持って、仙人の横に行つて、仙人の動きを観察しながら釣りをしてみた。仙人はいっぱい釣れる。ぼくは全く釣れない。同じ場所なのにおかしすぎる。やっぱり魔法を使って釣りをしているんやなと思った。突然仙人がぼくに話しかけてきた。

「このエサ付けてみ。」

と言つて、キビナゴという魚をぼくに投げてきた。ぼくは、この魚に魔法をかけてるんやろなと思った。おそろおそろの針にキビナゴを付けてみた。魔法で手がピリピリしたりするのかなと思つたけど、大丈夫だった。ポチャンと海にキビナゴをつけてみると、急に今まで感じたことがないぐらいのあたりがきた。すさまじい力だ！ぼくは、魚に海に引きずられそうになった。生まれて初めて、魚と生きるか死ぬかの戦いをした。大接戦の結果、ぼくが勝利することができた。生き抜くことができてホッとした。命をかけて引き上げた魚は、石ダイという高級魚だった。ぼ

くは仙人の魔法のおかげで大物を釣り上げることができた。そのことがきつかけで、お母さんやお兄ちゃんも仙人と仲良しになった。お兄ちゃんは、仙人に魔法のウキと魔法の針を付けてもらい、仙人にはかなわないけど、割と大きな魚を釣ることができた。

帰りの車の中は、仙人の話題でもちきりだった。突然、ヘッドライトに仙人らしき人が照らされた。仙人がふわっとどこから現れたのでみんな驚いた。仙人は防波堤から、歩いて帰っていたのだ。仙人の家まで車で送ってあげることになった。仙人の案内で家に着いた時、

「夜光貝でアクセサリーを作っているんよ。よかったら、工房を見ていく?」

と言ってくれた。みんなで工房に入ると、夜光貝で作られたウミガメのペンダントやイルカの形をしたお皿など海の生き物をモチーフにした作品がいくつか並んでいた。気になる作品を手にとった瞬間、未知なる世界に入ったような不思議な感覚に包まれた。工房内の全ての作品があなたかくて、どの作品も生きているみたいにも動き出しそうだった。仙人はぼくたちをじっと見つめて、

「好きな生き物の名前を言ってみて! 作ってあげる。」

と言ってくれた。何を作ってくれるのか分からなかったけど、なんだかうれしくなつて、

「やったあ!!」

と言った。その言葉を聞いた仙人は、

「ケケケツ ケケケツ」

っと、肩を震わせて笑ってくれた。仙人は、

「クジラ? イルカ?」

とぼくに聞いてくれたけど…ぼくの推しの生き物は、ヤシヤハゼだ!

「うううん。ハゼ!」

と答えた。すると仙人は、

「ハゼ? ハ…ゼ? ハゼー!」

と言った。その言い方がおもしろくって、プププツと笑ってしまった。仙人は、突然黙って、少し天井を見上げて、ものすごい勢いで作品を作り始めた。工房の空気が急に変わった。ぼくが驚いて固まっている間に、作品はできあがっていた。そこには、一本の針金で、やさしさ、かわいらしさ、力強さを同じくらのパワーでもち合わせているバランスのいいハゼが誕生していた。仙人に、

「ありがとう。」

と伝えて、宿に帰った。

次の日、奄美大島に移住している友たちがお誕生日だったので、昨日見せてもらっ

た仙人のアクセサリーを買いに行くことにした。仙人は、工房内にハンモックをぶら下げて、気持ちよさそうに宙に浮いて眠っていた。ぼくの姿をねむたそうにうす目を開けて見ると、顔をシワだらけにくしゃくしゃにして笑ってすぐに飛び起きてくれた。友だちのお誕生日の話をしたら、

「自分たちでプレゼントを作ってみたら？」

と提案してくれた。ぼくは、やってみたいなと思ったけど、話の展開のスピードに追いつけなくなつて、固まってしまった。そんなぼくの様子をみて、仙人は、工房内の夜光貝に魚の絵をサササーと描いてくれた。そして、

「これをけずってみたら？」

と言ってくれた。仙人はぼくたちに、夜光貝の特徴、削り方、磨き方、穴の開け方を丁寧に教えてくれた。どの作業も難しかったけど、お兄ちゃんと力を合わせて取り組んだ。仕上げに、いろいろな種類のヤスリを使って磨き続けたら、ピッカピカに輝く虹色の魚の作品が完成した。生まれて初めて作った夜光貝のアクセサリーを友だちにあげると、虹色の魚を太陽の光に当てて、更にキラキラに輝かせてくれた。そして、ぼくたちにゆつくりと丁寧に、

「ありがとう。」

とにつこり笑つて言ってくれた。今まで味わったことのないほかほかした達成感を

感じた。

その日の夜、仙人に『夜釣りする?』とメールを送ると『いいよ』と返事がきた。また仙人に会えると思ったらワクワクした。仙人と一緒に車に乗って、まずは飲み物を買って集落の商店に向かった。店の前には自動販売機が並んでいて、仙人が、

「この販売機がおすすすめ。当たりがあるよ。」
と言って、見本を見せてくれた。魔法を使って当てるのと違うかな? と思って、ドキドキしてじっと見ていたら…

「ぞんねーん。」

と子どもみたいに笑いながら悔しがっていた。

「これは、どのくらいの確率で当たるのん?」

と聞くと、しばらく考えて、

「三十年間で二回かな?」

とニヤニヤして言うから、

「当たる確率低すぎるやん!」

と笑いながら突っ込むと、仙人は爆笑しながら、

「楽しみや。楽しみ。なんにもないものより楽しみが多いものの方がいいよ。」

とむじゃきに笑いながら教えてくれた。思わぬところで仙人の名言が聞けたと思っ

た。ぼくたちも一人ずつ順番に三十年に二回しか当たらない低確率自動販売機で
うんだめ
運試しをした。一人ずつ、はずれる度にみんなで笑い転げた。いつの間にか、みん
な当たり前よりはずれを期待していた。あべこべになっているから、不思議でおもし
ろかった。

飲み物を確保した後、すぐに車に乗り込み、仙人の推しの夜釣りスポットに案内
してもらった。長い堤防ではなく、短くて船がいっぱい止まっているところだった。
大物が釣れそうにない場所だったので、えー!? と思った。仙人に理由を聞くと、
「船と船の間に大物がいるんだよ。ここは魚の通り道になっているからね。」

と小声で極秘情報を教えてくれた。さすが仙人や。長年の経験で知っているんやな
とおも
と思った。

いざ釣り開始! 仙人の釣竿が急にグニャンと芋虫みたいにキュキュとしなった。
仙人は釣竿を少しあげた。海の中から大きな影が浮かびあがってきた。そして、ゆっ
くりゆっくり魚の動きに合わせながら釣りあげた。フエフキダイだった。ぼくが
釣った一番大きな魚の何十倍ものでかさだったのだ、目がまんまるになった。この
後、仙人はもう一匹大きな魚を釣った。帰る時に仙人は、自分が釣った大きな二
匹の魚をくれた。その時に、仙人はぼくたちの為に夜釣りに来てくれていたんだ
と知った。宿に帰って、お兄ちゃんが、大きな魚を刺身にして食べさせてくれた。

ぷりぷりした食感しょっかんと共に甘い味あまが口の中くちなかに広がった。食たべながら、明日あした、大阪おおさかに帰かえったら、仙人せんじんともう会あわれへんくなるねんな：お別わかれするのはつらいなと思おもった。

次つぎの日ひ、飛行機ひこうきに乗のる前まえに、仙人せんじんに会あいに行いった。仙人せんじんは、いつものようにハンモックで宙ちゆうに浮ういてニコニコしていた。ニコニコした仙人せんじんの笑顔えがおをみると別わかれがっらくなつて涙なみだがあふれてきた。ぼくの涙なみだをみると仙人せんじんも別わかれがっらくなるだろうと思おもって、目めをぎゅっとつむつて涙なみだが流ながれ落おちないようにした。目めを強つよくつむればつむるほど、仙人せんじんにいろんなことを教おしえてもらったことや一いっしょ緒しょに笑わらい転ころげたことを思おもい出だした。

仙人せんじんに会あつてから、ぼくはいつでもどこでも『楽たのしみ探さがし』をするようになったよ。楽たのしみが増ふえたと毎日まいにちが何なん十倍じゅうばいも楽たのしくなるね。また、一いっしょ緒しょに遊あそぼうね！ 仙人せんじん！

友達と釣り

津田 旭

あかしりつたいかんしょうがっこう 五ねん
明石市立大観小学校 五年

上手に教えてくれそうな友達と釣りにいった話。
友達にアドバイスをもらって買った釣りざおがあった。最初父はどんなさおを買
うのかをけいかいしていたが、説明の途中でお金のことでなにか安心したよう
でいいよという感じになっていった。人の釣りざおを持たせてもらったことはある
が、自分の釣りざおを持って魚を釣ることはなかった。早く使ってみたいとわ
くした。

しかけの付いた針、リール、さおを買った。とくにリールはこうふんした。目を

細めると宇宙船に見えた。ハンドルを回すとリールはせいみつにいたりきたり、速いところゆつくりなところ別々の動きがあらわれて見えた。

感動したままだう使えばいいのか分からないので袋に入ったままだった。友達がついに「一緒に行こう」と決めてくれた時、僕はウキウキした気持ちで待っていた。その日になると友達ら用意から手伝ってくれた。僕とお兄ちゃんらは家にある、釣りに役に立ちそうなものを集めておすすめの釣り場に向かった。海辺にはもうたくさん人がいて、魚が全部釣られるというのではないだろうが、たくさん釣られたらどうしよう、さっきまでなかった欲がわいてきた。釣り場に着くと僕も友達に教わりながら釣りをしてみた。

ずっとやりたかったことができて嬉しかった。魚がかかるのを待った。細いさおの先がうえーしたーうえーしたーとなるのを見ているだけで面白かった。波のリズムもちがうのだ。うえーしたーうえーした、うえーとたまに変化するの、「魚？」と毎回思う。ただしかけが海の底に当たったか、海の中の流れが変化しただけらしいのだ、慣れることがなく毎回「魚？」と思えるのが楽しい。でもそれがずっと楽しいわけではなくて釣りというものは思ったより我慢が必要なものだ。最初は楽しかったが時間が経つにつれて不安になった。「つれていいよ」と小さく言いながら釣っていた。周りの人たちは少し釣れていた。結局、その日一匹も魚を釣ることが

できなかった。それをボウズと言うらしい。みんなで釣り場を変えることにした。お兄ちゃんにいちゃんは疲れ切った表情で、「次の釣り場はつれるといいな」と言ったが、その後家あといえに寄ると「釣りは見えているだけでは気絶するほどつまらない」と眠ねむってしまつた。兄にいちゃんは置いて行けないので少し待まちって友達とおやつを食たべて、つりざおを散ちらかしたままにしていたらあとで怒おこられました。

ぼくのお好きな明石ノリ

義経

あかしないしょうがっこう
明石市内小学校 五年
よし つね

ぼくが大好きな明石ノリについて、調べました。
ぼくのお父さんは漁師です。夏は、タコやアジを獲って、それ以外はノリを作っています。お父さんのノリは、特別美味しいです。真つ黒でツヤツヤで、口に入ると溶けてしまいます。食べ出したら止まりません。そんな明石ノリについて、お父さんに教えてもらった事と、明石市役所ホームページを参考に調べた事をまとめました。

ノリは、タコやタイに続き、明石の海の誇るブランドと言われています。明石

近海は、速い潮の流れや海中の豊富な栄養分、適度な水温など、ノリの養殖に最適な条件がそろっています。そのため、明石ノリは、味の良さはもちろんのこと、黒くてツヤがあり、香りが良い逸品として多くの人に親しまれています。兵庫県の養殖ノリといえば、令和四年・五年と二年連続で、十九年連続日本一だった佐賀県を上回り、生産量日本一となりました。

明石ノリの旬は十二月から三月ごろの冬ですが、養殖の準備は夏から始まります。だから、ぼくのお父さんは一年間のうち、八月のお盆あたりから翌年の五月頃までの約九ヶ月間、ノリ作りを頑張っています。

ここからは、明石ノリができるまでの行程を紹介します。

①夏の間、カキの殻を使って、ノリの種をつくりだす系状態を培養します。

②種付けをします。種付けとは、網にノリの種をつける作業です。その時に、大きな水車をグルグル回しながら、種を網に付けます。網の周囲にウキを付け、網を海に張って上げたり下げたりして、ノリの芽を育てます。

③箱船から手作業でノリ網を張る本張りをします。この作業で、お父さんは特に腰を痛めています。

④いよいよ収穫です。十二月上旬から始まり、翌年の四月か五月まで収穫が続きます。

⑤ 収穫^{しゅつかく}したノリを加工^{かこう}します。ノリに付^ついているごみを取りのぞいて、ミンチという機械^{きかい}で細^{こま}かくします。

⑥ 後は、かんそう機^きでかわかしたら、検査^{けんさ}へ出^だします。出来上^{できあ}がったノリの検査^{けんさ}は、センサーでチェックすると共に、人^{ひと}の目で一枚一枚丁寧^{ていねい}に確認^{かくにん}されます。ようやくこの後^{あと}、販売^{はんばい}が始^{はじ}まり、各家庭^{かくかてい}で味わえます。

このように明石^{あかし}ノリがたくさんの期間^{きかん}をかけて、丁寧^{ていねい}に丁寧^{ていねい}に行程^{こうてい}を進^{すす}めてつくられた事^{こと}は、調べるまで知りませんでした。明石^{あかし}ブランドとしてこれからもっと多くの人^{ひと}に知^しってもらえたらうれしいです。

お父さん^{とうさん}、いつもお仕事^{しごと}お疲れ^{つか}れさまです。

令和のイカナゴは高級品

伊丹市立狹野小学校 五年

木元 孝亮

毎年春になると神戸に住んでいるおばあちゃんがイカナゴのくぎ煮を作ってくれます。

イカナゴの稚魚・シンコの漁の解禁日におばあちゃんが明石の魚の棚商店街にある魚屋さんで水揚げされたばかりの、新鮮なイカナゴを買ってきて、家族や親せきに送る分のくぎ煮を作るそうです。

しょう油、砂糖、しょうが、みりんなど、ひいおばあちゃんが残してくれた秘伝のレシピを使って炊いています。

イカナゴのくぎ煮ができると、タッパーを持って神戸のおばあちゃんの家に取りに行くことが、ぼくの家の春のこう例行事です。

くぎ煮を作るお手伝いをしてみたいと思っていた時、二〇二四年のイカナゴ漁の解禁日が三月九日の土曜日に決まったということをニュースで知りました。学校の授業がない土曜日だったので、おばあちゃんの家に行つてくぎ煮を作るお手伝いをする約束をしました。ところが、解禁予定日の前々日に、播磨灘の天候不良のため、漁の解禁が十一日の月曜日に延期になってしまいました。平日の学校で授業がある日なので、お手伝いすることはできませんでした。

十一日の解禁日、おばあちゃんが、例年通り魚の棚商店街の魚屋さんに買いに行つてくれました。早朝からお店に並んでくれました。四時間くらい並んで、三回目目の入荷の時にイカナゴを買うことができました。過去最高の値段、一キロ八千円でした。なんとその日で今年のイカナゴ漁は終漁してしまいました。

おばあちゃんは、二〇二三年は一キロ四千円だったのが、たった一年で二倍の値段になったことに驚いたそうです。

ぼくが好きな魚の鯛の値段が一キロ二千円くらいなので、小さなイカナゴのシニコの値段に驚きました。今から約四〇年前におばあちゃんがイカナゴのくぎ煮を作り始めたころは一キロ六百円くらいだったそうです。二〇〇〇年代に入ると一キロ

千円せんえんを超こえてきたそうです。

昔むかしはお手頃てごろな食材しょくざいだったのが、今いまでは高級食材こうきゅうしょくざいになってしまったと、おばあちゃんおばあちゃんが言いっていました。

値段ねだんが高たかくなっているのは、ここ数年すうねんのイカナゴの不漁ふりょうが原因げんいんだとニュースで知しりました。だから今年ことしは一日いちにちだけの解禁かいきんだったのかなとほくは思おもいました。

全国ぜんこく一位いの漁ぎよかく量りょうをほこる兵庫ひょうご県けんでは、昔むかしは一万トン以上いちまんいじょうとれていたのが、今いまでは二千トンにせんにも満みたない数かずしか取とれないそうです。

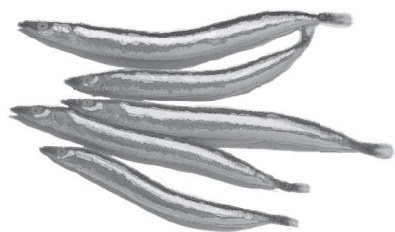
以前いぜん、明石あかしの水産技術センターすいさんぎじゅつに見学けんがくに行ったとき、イカナゴが減へっている理由りゆうを職員しよくいんの方かたから教おしえてもらいました。兵庫ひょうご県けんは昔むかしに比べて、生活排水せいかつはいすいのルールをきびしくしたことうみで海の水質すいしつが良よくなりました。海の水うみがきれいになりすぎたことうみで海の中の栄養えいようが少すくなくなり、魚さかなのエサが減へってしまいました。そのためイカナゴがやせてしまい、卵たまごを産うむ力ちからも弱よわくなったので、だんだんイカナゴが減へってきているそうです。

水産技術センターすいさんぎじゅつでは、イカナゴが住すみやすい海うみにするための研究けんきゅうに取り組くんでいるそうです。漁業関係者ぎしやうかんけいしやの方かたも、イカナゴの数かずを増ふやすため、海うみをたがやして栄養えいようを取り戻もどす取組くみをされていることも知しりました。

ぼくのお母さんかあが子こどものころは、今いまよりもっとお手ごろな値段ねだんでイカナゴが買か

えたので、くぎ煮をたくさん食べていたよと言っていました。くぎ煮以外にも、かま揚げや、天ぷらにして食べていたそうです。

水産技術センターの方や漁業関係者の方の努力が実を結べば、イカナゴの数が増えて、昔のようにお手頃な値段で買えるときが戻って来るかもしれません。ぼくはおばあちゃんがつくってくれるイカナゴのくぎ煮が大好きなのでたくさん食べられる日が来るのをとても楽しみに待ちたいと思います。



〈中学生の部〉
ちゅうがくせい
ぶ



離島の海をいつも心に

はる

九州本土からフェリーで約二時間、人口たった数百人、隣町まで車で三十分以上。そんな小さな小さな漁師町を初めて訪れたのは、僕が小学校三年生の秋でした。

僕はその翌年、小学校四年生の時、親元を離れ、その島に留学をしました。島の小学校は、幼稚園と同じ建物にあり、クラスも複式学級でした。

四年生の僕は、三年生と同じクラスで、二年生合わせても生徒はたった十一人、それでも、この小学校の全校生の半分以上をしめていました。教室には、前と後ろに黒板があり、四年生の授業の時には前の黒板を、三年生の授業は後ろの黒板を

使つかつて行おこなわれました。

全校生のほとんどが九州や近畿からの留学生だったので、祖父母と同じくらいの年齢の里親も家から通う僕たち留学生はいつも一緒でした。

そんな島での毎日は、海を強く感じさせるものでした。

大人の主な仕事は漁師で、この島では、いつも海とともに生活がありました。地元の子供の親のほとんどは漁師でしたし、僕の里親になってくれたおじいさんも若い頃は腕利きの素潜り漁師だったそうです。

僕たちは、毎日、町中を走り回り鬼ごっこをしたり、海岸で貝殻やサンゴのかけらを拾ったり、小石がたくさんある海水浴場では、海に石を投げ水切りをして遊びました。

週末の楽しみは、何といっても釣りでした。地元では見ることでできないカラフルな魚や、なかなか釣ることのできない高級魚も釣り糸を垂らすとすぐに釣ることができ、僕はすっかり魚釣りにはまってしまいました。

東シナ海に面した島では、容赦なく風が吹き付け、台風のような荒つぽさで、雨の日には、傘は何の役にも立ちませんでした。雨の日の僕たち小学生の通学は、レインコートと長靴が制服でした。風が強い時には、毎日二便あるフェリーは、欠航や島にある他の大きな港にだけに泊まり、僕たちの町の港は飛ばされ、週に一、二

回しか寄港しないこともあるほどでした。

そんな自然があふれ、海の恵みのあふれるこの島で、僕たちは一つの問題を発見しました。

それは、遠足で集落から三十分ほど歩いたところにある島の先端にある岩盤に囲まれた海岸でのことでした。そこは、海鳥の生息場所を見ることができ、展望台から、階段で降りることのできる一辺が五十メートルはあり、大きな岩盤からなるとても日本の景色とは思えないような迫力のある断層と岩盤が広がる入り江にありました。

海流の関係なのか、それとも普段から人が使わない場所だからなのか、どこから流れついたのかわからない漁具や外国語の書かれたボトル、もともと何だったのか想像もつかないような迷彩色の爆弾を思わせるプラスチックの塊、風呂のバスタブまでが大量に流れつき、海辺を埋め尽くしていました。

確かに台風の後には、地元でもたくさんの漂着物があつたのを見たことがあります。したが、大きさも量も種類も、実際に目にするまでは想像したことさえもないものでした。

陸を見たら、素晴らしい断層が広がって、海はエメラルドグリーンの澄んだ色をしているのに、残念なことに海辺には大量のゴミが残されていたのです。海が好き

な僕は、強いシヨックを受けました。

遠足から帰って里親のおじいさんにそのことを話すと、その入り江へは、足元の悪い急な階段を数百段歩いて下るしかなく、大きなゴミを運び出すのはかなりの重労働になること、岩盤で複雑に作られた独特の地形のため、海から船をつけることもできないうえ、集落自体が、年寄ばかりで数少ない若者はいくつも仕事をかけ持って忙しく、そこまでのゴミを回収する余裕がないと話してくれました。

その時は、まだ小さかった僕は、そうなんだと残念に思っただけでそのことは気にも留めず、また、いつものように遊び場である集落の近くで遊んで過ごしました。地元に戻って二年ほど経ち中学生になったある日、クイズで、日本で一番海洋ゴミの多い場所はどこか？という問題を見ました。その答えは、日本の西の端、ユーラシア大陸に一番近い対馬列島だそうです。それを見て、同じ東シナ海に面した僕が留学した島にたくさんさんの海洋ゴミがあったことが腑に落ちました。過疎化、高齢化が進んだ離島では、ゴミの回収は大きな問題です。

もちろん、都会のように気軽にボランティアが集まる訳ではありません。そして、万一、回収できたとしても、その大量のゴミを処理するための処理場が必要になります。都会のような性能の良いゴミ処理施設はあるはずありません。

僕も地元の海岸での、海岸清掃ボランティアに一度だけ参加したことがあります。

都会では、海を汚すのが人間なので、同じ地域の間が清掃活動をすることは意味があるし、地域に海を守ろうというアピールにもなります。しかし、本当の問題を考えるなら、僕が留学した島のような離島も含んだ取り組みをしないと意味がありません。

離島の生活は、僕達子どもの目から見ても裕福とは言えません。地形的な問題、地図的な問題、高齢化の問題、過疎化の問題、ゴミ処理場の問題など解決しないといけない問題は山積みです。

留学から帰って、高学年、中学生になり、環境の授業を学校で受け、自由研究で海の環境を調べ、里海を知るワークショップに参加し、海岸清掃のボランティアを経験した今では、留学生だった昔の僕よりもっと離島のことを深く考えることがでさるようになってきました。

僕の第二の故郷の離島のことをもっと都会の海しか知らない人に伝えられたら、何かが変わっていくのかもしれないと思っています。



〈選考委員講評〉

せんこういいんこうひょう



最相葉月

ノンフィクションライター

1963年東京生まれの神戸育ち。関西学院大学法学部卒業、会社勤務を経てフリー。科学技術と人間、スポーツ、音楽、精神医療、宗教などを取材。『絶対音感』で小学館ノンフィクション大賞、『星新一』100一話をつくった人で大佛次郎賞、講談社ノンフィクション賞などを受賞。他の著作に『青いバラ』『セラピスト』証し 日本のキリスト者』など。児童書に『調べてみよう、書いてみよう』。

「こども海の文学賞」は3年目となり、全体的にレベルが高く、読みごたえのある作品が多かった印象です。一人一人が独自の視点を持ち、体験したこと、考えたこと、感じたことを丁寧に文章に書いて、知らないことをたくさん勉強させてもらいました。事務局のある関西のみならず、北海道や四国など広いエリアから応募があったこともうれしく思っています。

小学生の部の最優秀賞は、今回も2作品が選ばれました。志賀さんの「海の管制官」伊良湖水道の守護神」は、海上交通をテーマに実際に見学し、法律ができていく歴史も調べ、取材したことが順序立てて書かれており、ノンフィクションの役割を果たしている秀作です。立山さんの「海水の力植物のふしぎ」は、マン

グローブを見に行ったことにとどまらず、塩水で植物が育つかどうか仮説を立て、実験して検証する様子まで描かれています。観察力も表現力もすばらしく、とてもおもしろい作品で、小学2年生の力に驚かされました。

優秀賞はいずれも1年生が受賞、素直さが輝いています。松隈さんの「おくいぞめのたい」は、弟が誕生して100日を祝う様子を丁寧に伝えてくれ、弟がかわいいのだろうなと読んでいて笑顔になりました。若狭さんの「おさかなつりたい」は、おじいさんの言葉に味があり、無駄のない文章でリズムがよく、自分の字できつくり書いていることも好印象です。

入賞は8作品が入りました。坂本さんの「明日の能登」は、なかなか復興が進まない現地の様子が伝わり、作品の終わり方が切ない雰囲気のある文章です。梅崎さんの「海とびわこ」は、きちんと考えをまとめて海と湖を比較しています。松下さんの『海の本キシャ! 2024』に参加しては、明石の海の問題を取材して整理し、詳しく説明しています。田中さんの「オーベイとたたかった海」は、家族のシルエットが目につかび、繊細な感性を持つているなと感じました。今村さんの「仙人との出逢い」は、文章に世界観があり、ひきつけられます。津田さんの「友達と釣り」は、気持ちの描き方が独特で魅力的です。義経さんの「ぼくの大好きな明石ノリ」は、ノリを作る工程がよくわかり、おいしいノリを食べたくなりま

した。木元さんの「令和のイカナゴは高級品」は、具体的に値段を出して高くなつたことを数字で表し、説得力があります。

中学生の部で入賞した、はるさんの「離島の海をいつも心に」は、島で過ごす中で大量の漂着ゴミを目撃してショックを受け、なぜ回収できないのかも書かれ、一般論的な海ゴミ問題とは一線を画している作品であることを評価しました。

ノンフィクションは、文章のうまさや感性、思いだけではなく、事実に基づいた上で感情を動かされるのがおもしろいところです。世界の見方を一変させる力があります。調べ学習をしたときに、調べたことの中に自分が何を見たか、何を感じたかまで深く考えてみれば、あらたな気づきがあるかもしれません。そして、もっと知りたくなれば、どんどん調べていきましょう。

この文学賞は「海」に絞られています。今回も幅広いテーマの作品が届きました。同じテーマに関心を持ち、書き続けるのも意義深いことです。さらに、なるべく自分の外にテーマを見つけるよう意識してみてください。体験したことからもう一步踏み込み、疑問を持ち、新しい視点をみつけてみてください。

皆さんの日常の中にある海のノンフィクションの力作が、次回もたくさん届くことを楽しみにお待ちしております。

たなか しん

画家・絵本作家

絵の地下にアトリエのある明石の海の砂を使い、独特のマチエールを生みだす。海砂は波打ち際の細かい部分を使う。そこには、山から運ばれた岩や砂など大地の恵み、海から運ばれた貝殻や珊瑚などの海の恵みが混ざり合う。採取した海砂は塩を洗い流し、天日に干す。そうすることにより、太陽のエネルギーさえもキャンパスに閉じ込める。画家として活動する傍ら絵本を描き始め台湾の出版社から絵本作家デビュー。以降、国内外で出版を重ねている。『富士茄子牛焦げルギー』（BL出版）で第53回日本児童文学者協会新人賞受賞。

「こども海の文学賞」は回を重ね、3回目となりました。年々テーマが多様性に富むようになり、自分の言葉で書かれた作品が多く、楽しく読ませてもらっています。2回、3回と読むごとにあらたな発見がある、味わい深い文章も増えていて、ワクワクした気持ちになります。たくさん応募ありがとうございます。

小学生の部の最優秀賞、前回「異例の2作品受賞」とこの欄で書いたのですが、今回も2作品を選出しました。いずれも、こども海の文学賞として新しい視点をくれる、すばらしい作品です。志賀君の「海の管制官」伊良湖水道の「守護神」は、

読んだあとすぐ地図を調べたのですが、そうしたいと思わされたというのは作品に力があるからです。現地で管制官に聞いた言葉を丁寧にまとめつつ、自分の視点でつづられており、原稿用紙20枚書き上げたことにも熱意を感じました。立山さんの「海水の力 植物のふしぎ」は、とにかくおもしろく、たくさんの驚きをもらいました。調べたことは資料も示し、実際に見に行った事実と感じたことを生き生きと書き、さらに実験までして、オリジナリティにあふれています。優秀賞だった前回からの成長を見られたこともうれしく思います。

優秀賞になった1年生の2作品からは、日ごろ絵本をよく読んでいるのかなと感じました。もしそうなら、絵本作家としても幸せです。松隈さんの「おくいぞめのたい」は、弟への愛情がたっぷり込められた一つの物語になっていて、温かい光景が目に見え、絵本にしたいような作品です。若狭君の「おさかなつりたい」は、セリフの入れ方が上手で、音をタイミングよく織り交ぜ、細かく描写できています。臨場感たっぷりです。

被災地の能登をテーマに、何もないことの意味合いが変わっていくことを描いた坂本君。びわこと海を比較し、わかりやすく違いを教えてくれた梅崎君。地元明石の海の現状をしっかり取材し、伝えてくれた松下君。海に出かけたときのことを、兄弟の真ん中である心理を描写しながら自分の言葉で表現した田中君。仙人との交流を、

文章を盛り上げていきながら楽しくつづった今村君。友達と釣りに行く様子が細部まで映像が目に浮かぶような、自分のスタイルで作品を仕上げた津田君。父を尊敬するまなざしで、明石のノリができるまでを紹介した義経君。近年高値になったイカナゴに着目し、おばあさんとの話を盛り込んで誠実に記した木元君。個性あふれる8作品が入賞したことも、今回のこども海の文学賞の充実ぶりを示しています。

中学生の部の受賞は入賞の1作品にとどまり、少し寂しい結果となりました。そのような中で、はるさんの「離島の海をいつも心に」は、小学生のころに島へ留学した経験と、そこで見た光景を、自分の目と心を通して文章にしていることが評価されました。留学後の今も自由研究やボランティアをしていることが書かれており、今後の活動にも期待しています。

惜しくも受賞に至らなかった作品の中にも、きらりと光る表現や興味をひくテーマがあり、子どもたちの情熱や観察力、書く力を大いに感じさせてもらっています。作品を読みながら「おもしろい」と口にし、「そんなことがあるんだな、知らなかった」とうなずくことが何度もありました。同時に「もっと書いてほしい」という願いも強くなっています。「海」に関係するテーマはたくさんあります。書くことが苦手でも、気になること、おもしろいと思ったことを、文章で伝えてみることから始めませんか？ぜひ挑戦してみてください。そして、こども海の文学賞を共に進化させていきましよう。

あとがき

川崎 喜昭

あかし
明石おさかな普及協議会会長

2022年7月の海の日に、「こども海の文学賞」は誕生しました。子どもたちに海や魚に親しんでもらい、文章で表現してほしいとの願いを込めて始まった賞は、第3回となりました。2024年も7月15日の海の日から募集を開始し、小学生74点、中学生5点、計79の作品が寄せられました。今回も地元の明石市をはじめ、関西にとどまらず、北海道や東北、関東、中部、四国など日本各地から熱のこもった作品が届きました。この賞を皆様と共に育てていると感じられ、うれしい気持ちでいっぱいです。

あかし
明石おさかな普及協議会は、明石市公設地方卸売市場にある水産の卸業者、仲卸業者でつくる団体で、おいしい海の幸をたくさん食べてもらいたいと普及、啓発の活動をしています。こども海の文学賞の取り組みを通して、豊かな海を未来へつ

なげていかなければならないという願いが強くなっています。作品の募集にとどまらず、子どもたちが海の生き物に触れ、関係者の話を聞く機会をつくることも重視してきました。また、地元の小学校では書き方の出前講座も行い、この事業の充実を図っています。そのような場での好奇心旺盛な子どもたちの表情を見ていると、明るい未来を感じることができます。

今回、小学生の部の最優秀賞に2作品が選ばれました。志賀優龍さんの「海の管制官」伊良湖水道の守護神」は、海にはさまざまな仕事があり、使命を持って働くことの意義をあらためて考えさせられました。立山怜佳さんの「海水の力植物のふしぎ」は、興味を持って調べ、生き生きと観察や実験をする姿が思い浮かび、ノンフィクションの奥深さを教えてもらいました。

受賞作品は小中学生合わせて13作品となり、過去最多となりました。この作品集に収めていますので、ぜひ多くの方々に読んでいただき、子どもたちの豊かな感性を受け取ってください。

最後になりましたが、選考委員、協賛や協力の団体・企業、講座開催や告知などで関わってくださった方々、応募を取りまとめくださった学校関係者はじめ、企画、実施にあたりご尽力いただいたすべての皆様に厚く御礼申し上げます。

だい かい
第3回ことも海の文学賞作品集

うみ かんせい かん
海の管制官く伊良湖水道の守護神く
かい すい ちからしよくぶつ
海水の力植物のふしぎ

ねん がつ にち だい すりはつこう
2025年7月1日 第1刷発行

はつ こと あり
発行 明石おさかな普及協議会
ひょうしきしえ ひらいしほ
表紙挿絵 平井志歩
そつ てい きたはらかずき
装丁 北原和規 (UMMM)
きょうりよく あり
協力 明石市漁業組合連合会
ひょうこげんぎきょうきょうどうくみあいれんごうかい
兵庫県漁業協同組合連合会
ありしりつとしょかん
明石市立図書館
かぶしきがいしゃ
株式会社ペンコム
かぶしきがいしゃ
株式会社ライツ社

うみ ぶんがくしょうほーむページ
こども海の文学賞HP
<https://www.akashi-osakana.org/bungaku/>

ほんしよひだんでんさいふくせい きん
本書の無断転載・複製を禁じます。